慈光

第三十巻　第五号

昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十三年五月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

（通第三四七号）

目次

近角・菅瀬両師の病床筆談……(1)
「われはわろし」……白井或允……(3)
歎異抄のすすめ……田村実造……(10)
足利浄円師ご法話随聞記……西元宗助……(13)
聞光願生……清水凡禿……(16)
念仏詩抄……木村無相……(18)
世間虚仮・唯仏是真……花田正夫……(21)

近角・菅瀬両師の病床筆談

（註）菅瀬芳英師は明治五年広島県に生れ、法隆寺の佐伯定胤貌下に唯識を学び、天台宗大学、高輪の仏教大学に教鞭をとらる。其間、同和学園を創設し青年学徒の養成に専念さる。大正五年末、上皮癌を病み、六年四月に往生せらる。生年四十六。左記は、病床に近角師が見舞われ、筆談せられし記録である。（西本清三氏所蔵）

○

勿体なや、乗彼願にて到彼岸（病名上皮癌）

強頑の坊主も癌で願往生

蓮如上人

「先生（ぜんしょう）より定まれる死期を急がんもかえりて愚にまどいぬるかとも思いはんべる」

とあり、可成加養して、この五濁悪世において御報謝をさして貰いたく候

（以上菅瀬）

○

世の中には健康のつもりのものが、忽にして頓死することもあり、病の人の随分長生きすることもあれば、信の一念に命終に候えば、そのうえは、唯仏の御はからいにまかせ奉るばかりに候。

併し健康の者は無常を忘れて居るを気付かせていただき病の人は死なんずるやらむと心細く覚ゆる心根を飽くまで察したまう如来聖人の仰せひとしお身にしむ事と存じ候。数年前病床にありし人、先日危篤の時、歎異抄第九章を力として、いかにも安心いたし候様子を見て、かえって聖人の仰せを事実的に見せて貰い候。併し心細ければこそ、これを察したまう御慈悲が一入ありがたきことと存じ候、寒い時には火が何よりのたよりに候。心細き時は、その心細き心を察して下さるお慈悲が一入に候。

福間（明治四十一年、下顎骨癌にて没）がとても覚悟が出来ぬ、あきらめられぬと申されし時、そのあきらめられぬ覚悟が出来ぬのを無理はないと仰せ下さるお慈悲であると申した時、大いに感ぜられしも此処と存じ候

（以上近角）

○

往生の一路平生に決す
今日何ぞ論ぜん、死と生と
蓮華界裡の楽を好むに非ず
娑界に還来して群萌を化せん

法霖大徳末期の偈

南無阿弥陀仏の廻向の　恩徳広大不思議にて
往相廻向の利益には　還相廻向に廻入せり

（以上菅瀬）

○

報仏報土ということは、その時にあらざれば分らねど、我等を憐愍して下さる御慈悲の塊に候。

大悲の誓願に酬報するが故に真の報仏土というとの意味どうして下さるか、往きて見ねば分らねど、飽くまで見捨てぬとの御真実がわかれば、あなたまかせ〳〵。

（以上近角）

○

あくまで見捨てぬ御慈悲、往生を誓われた往生浄土があり難し。

（以上菅瀬）

○

信は願より生ずれば　念仏成仏自然なり
自然はすなわち報土なり　証大涅槃うたがわず

最後までいそぎ参りたくもなく、心細くおぼゆるこころをしろしめして、待ち受けたまう御慈悲の力まで喜ばぬにて、往生はいよいよ一定とおもいたまうべきなり。

（以上近角）

○

まだ病症がさほど進み居らざれば、心細くと云う事にはならず。

（以上菅瀬）

○

道楽ものが、まだ金がある、もっと窮せねば帰る気にならぬと思う様なものなり。

（以上近角）

○

これが強頑（ごうがん）の坊主のところならんと信ずるで、いよいよ煩悩強盛にこそ。

（以上菅瀬）

○

その煩悩熾盛の強頑坊主が、もっとも可愛想なとの仰せとあれば頭があがらぬ。

（以上近角）

○

併しあなたよりは私は大強頑坊主なり。

強頑、強癌、強願、業癌、業願。

〆めて、南無阿弥陀仏

（以上菅瀬）

○

福間さんの癌をよく見舞われたあなたが又癌にならるるとは如何なる因縁にやと存じ候。併しあなたの癌は悩（膿）のないは是亦不思議に存じ候

（以上近角）

「われはわろし」

白井成允

一、たれのともがらも「われはわろし」と思う者一人としてあるべからず。これしかしながら聖人の御罰を蒙りたる姿なり。これによりて一人づつも心中をひるがえさずば、永き世泥梨（ないり・地獄）に深く沈むべきものなり。これというも何事ぞなれば、真実に佛法の底を知らざる故なり。

（御一代聞書五十八条）

一

いつのことであったか、島地先生から、次のようなお話をおききしたことがありました。

大阪に一人の富める商人があった。悪しき友達に誘われて、酒色に溺れ、ようやく身を持ち崩すようになった。その妻なる人は心の剛い人であって夫の堕落を忍ぶことはできなかった。妻としての務めには、どうかして夫をこの迷いから醒めさせ、ふたたび正しく家業に励む人としなければならないと感じた。妻は夫をいさめ、酒の害を説いた、家をみだすことの非を述べ、古賢の言葉をも引いた。しかし夫の心はやわらがず、かえって日増しに妻を嫌うた。

或朝、妻は教会に引きつけられた。妻として正しい道を行うているのに理解されず、かえって嫌われる。思えば憎い夫をどうして正しい道に呼びかえらせることができるか——かく思い悩める妻は、神の義をきいて新しい力を得た。私は清く正しい、この清さ正しさをこそ神はほめたもう。私はこれをもって夫を化さねばならない。悪魔に魅せられている夫をその悪魔の手からとりもどし神の義（ただしき）に立ち帰らせなければならない、私は神の思召しをおこなおう——妻は今はあらたに神のむねを説いて夫に悔い改めを求める人となった。けれども夫の心はやわらがず、かえって日増しに妻を嫌うた。

妻は悩んだ。夫の放蕩はいよいよつのる。家庭はいよいよみだれる、悪魔の力はあまりに強い。

或る日、妻はお寺にさそわれた。ご縁が熟したのであろう——そこにはお念仏が待っておられた。お念仏のみ教は妻の心をひっくりかえさせた。それは妻自身が煩悩熾盛、罪悪深重の者であることを知らせて下さった。今まで久しく妻は自分の清さ正しさをもって、夫の醜悪に打ちかとうとしていた。自分は清く正しい、夫が穢れているのだ、自分は夫を悔い改めさせなければならない、そして家庭を清めなければならないと思っていた。ところが今やはじめて妻は自分があさましくきたなくよこしまなことを知らされた。妻は今はじめて自分の胸のうちに久しい前から渦巻く愛欲のしつこさ、ねたみそねみのおもいのはげしさ、愚痴と腹立ちの情の強さを見た。自分を清く正しい妻ぞと思いおごる増上慢によって、夫に親しむ人々に対する底知れぬ嫉妬により、夫の行いに対する慎志により、家庭に対する愚痴により、すべて自分のあさましさにより、夫を自分や家庭から遠ざけていたのである、夫を酒色に溺れさせていたのである。自分故に夫を迷わせていながら、その夫を責めののしり、自分をおごっていたのである。妻は今はじめて過去幾年にわたる自分の罪業を知った、驕慢を知った。同時に妻はかかる驕慢の者、夫を家庭から遠ざける顚倒の者、はてしない愚痴の者を捨てしりぞけずして、かえって憐れみたまい、飽くまでも救わんと誓いたたせたまう大悲の親様を聞いた。親様は南無阿弥陀仏と御身を示現したまうて、自分自身をまねき喚び、あわれみ、はぐくみ、護りたもうと聞き、このあさましい者が南無阿弥陀仏の御徳力に恵まれるさいわいに泣いた。

自分こそ夫を苦しめ、親様にご心配をおかけ申した身である、お念仏もうすほかに何ができよう。妻は今や夫に向って道を説き、それをいさめる人ではなかった、ただいつもおのれの嫉妬を慚愧し、夫をむかえる妻となった。

妻の変化はようやく夫をやわらげ、夫はやがて家に在って晩酌をとる人となった。或る時、晩酌の盃をとりながら、夫は妻に向って言った「この酒のためになあ、ながく迷うた、迷惑をかけた、この酒のためになあ」と。妻は答えた「何のとがもない酒に罪をきせる私共ですからね」。この言葉は夫の心をうった、そしてこの言葉の意味を問うた。かくて夫もまた、法を聞き、念仏もうす人となった。念仏のうちに和らぎ楽しむ家庭が生れた。

まことに妻の答のごとく、酒そのものに何の咎（とが）があろう、ただ己れの罪を見ることを知らない者は己れを罪せずしてかえって酒を罰します。顚倒の心である、この心から色々な禍悪が湧き来る。同時にかかる顚倒の心の持主は、妻にとってかつてその様に思ったように、夫のみではない「私共ですからね」と、妻自身がそうなのである。

ここに妻の答にはすこしも夫を責める心持は無い。ただ夫の言葉を縁として、夫も妻も諸共に、煩悩熾盛、罪悪深重にして、いつまでも生死の海に流転する一凡愚の身であることの痛ましき懺悔が流れ出たのであります。その懺悔

の奥には仏の智慧が照しています。仏智に照された者の自然の声であればこそ能く人を感動せしめたのであります。

二

「たれのともがらもわれはわろしと思う者、一人としてもあるべからず」これは自然の姿であろう。皆が皆、十人が十人まで、百人が百人まで「われはわろし」と思う者がない、皆が自分を善しと思っています。たまに、よくよく悪い事をしてしまって、自分がわるかったと気づくことはあります。けれど大概の場合に、そう気づいている場合にも、やはりその心底にいとしい自分が残っています。いとしい自分、自分のたましい、それまでも悪いとは知らない「如何にも自分は悪い事をした、然し、あんな境遇であったから、あんな場合であったから、あんな事柄であったから、ちょっとしたはずみであんなことをしてしまっただけだ。本当の自分が心奥からわるいのではないのだ」というように、どうしても奥の奥にはやはりいとしい自分が残っています。自分はどこまでもこのいとしい自分にかじりつきたい、それがなくなればたまらないのであります。これは凡夫の自然でありましょう。「聞書」の第一九五条に次の御誡めがあります。

「人のわるき事はよくよく見ゆるなり。わが身のわろき事はおぼえざるものなり、わが身に知られてわろきことあらば、よくよくわるければ身にしられ候と思いて、心中を改むべし。ただ人の云う事をばよく信用すべし。わがわろき事はおぼえざるものなる由、仰せられ候」

これこそ凡夫のありのままの状態をよくよく御誡めくだされた御語でありましょう。くどいようだけれども、この事はことに自分の子供の事などになると又甚だしいようであります。よく親馬鹿という言葉をききますが、まことに親の凡情から自分の子供のことは何でもいとしく、よくばかり見てしまって、どうも実状を見ない。悪い点などはなるべく見まいとする、悪い点も善い性質のあらわれだなどと見ようとする、ことに他家の子供たちと比較でもする時になると親馬鹿はいよいよ募ってくるようであります。他人から自分の子供の悪い事などを注意されると、かえってその親切な他人を怨もうとすることさえある、そうして子供を堕落さしてゆくようであります。

三

然し「たれのともがらもわれはわろしと思う者一人としてもあるべからず」と申されたこの「われはわろし」という自覚は、これを後に続くお言葉と合せて考えると、単に上に述べたことだけの意味ではなくして、更に深いことのようにうかがわれます。即ちそれは単に、この毎日の生活の上で、世間の風習や道徳やに照らした限りで自分の行いについて、われは善いの悪いのと言っている、ただそれだけの事なのではなくて、真実には、われそのものが奥底から悪い者であることを申されているのであろうと思います。世間的によし、あしと云って色々にあげつらう根底に存する、所謂いとしい自分、世に何よりも大切なものとして執着せずに居られぬところのいとしい自分、このいとしい自分こそ、久しい昔から迷い来り、行く末永く迷い去って遂に流転迷惑を脱する期の無いことを自覚することを、われはわろしと思う、と申されたのでありましょう。

我のあるところ我の執着がある、そこから凡百のあさましいわざわいがある。われそのものがわろき者なればこそ、何の咎もない酒にまで罪をきせます。機に応じ、縁に触れて、醜く穢い有様をあらわし出す。愛欲の海に溺れ、名利の山に迷う、争闘あり、怨恨あり、憎悪あり、煩悩の讐あい結んで綿々として解ける期のない悪世界を生み出します。その一切の禍悪の主である我をわろしと知る人が絶えてありません。このように、この仰せは、所謂、機の深信の無いことを示して居られるのであります。これは人間のありのままの姿においてである、仏教を真実に聞かない限りにおいてである。九十五種の外道はみな世を迷わす、唯だ仏の一道のみ独り清く閑かなのはこの故であります。

だから聞書の第八〇条に、このわれはわろし云々のお言葉を、無我の教と一つに続けて述べて居られます。

「仏法には無我と仰せられ候。われということはいささかあるまじきことなり。われはわろしとおもう人なし、これ聖人の御罰なりと御詞候。他力の御勧めにて候、ゆめゆめわれということはあるまじく候。無我ということ前住上人も度々仰せられ候」

われはわろし、自分は悪いと思う人が無いとの御訓えは、こう続けた文脈から拝読すると、われはと思う、この我の執着こそ悪いことだ、この執着を離れて無我になることが仏法の趣旨だ、ということを仰せられたように思われます。われは悪いの根源を一般的に考えれば、我執が悪いからであると云われましょう。私は我執を離れ得ないから、三世にわたって流転輪廻する迷惑の凡夫であるから悪いのであります。しかも今この御言葉は、我執は悪いと客観化しないで、それを直接に自分に取って、われはわろし、といただかしめたまうのであります。

されば、真実に仏法を聞かないと、三世にわたりて流転輪廻しつつ出離の時も無い自分であること、われはわろしと知る者が絶えて一人も存在しないことになります。

四

「これしかしながら聖人の御罰を蒙りたるすがたなり」聖人の御罰とは何の意味であろう。私は次のように伺い

ます。俗語に「親不孝のばちがあたった」とか、「ばちあたりの奴め」などと云う。親不孝すれば、その子を親が罰するというのではないが、自然に親不孝のばちがあたるのである。悪い事をすれば、その人を神仏が罰するというのではないが、自然に悪いことをした罰があたる。因果覿面（てきめん）とも云われる。今、聖人の御罰を蒙るとはこのことでしょう。聖人とはもとより親鸞聖人のことでしょう。然し現実の親鸞聖人そのひとを指しているのではなく、絵像、木像として示現して私共の礼拝の対象となって下さっているところの、如来応現の御身としての聖人であらせられる。この聖人が人を罰するというのではありません。悪人を罰するとか裁くとか、地獄に落すとかという事は仏教にはありません。ただ自分のあさましい無明煩悩のために、自分で罪を造り、地獄を造って、苦悩せずにはおられぬところの凡夫の姿を憐れとおぼしめして、悲しみ救いますお慈悲のみがましますのであります。如来の応現として慈悲をお伝え下さる聖人が人を罰するということは考えられません。聖人が私共を罰せられるのではないが、私共が聖人の御教を聞かないから、おのずから聖人に対し罰当りの奴となってしまうのであります。

聖人の常の仰せに「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを助けんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と御述懐候いしことを、今また案ずるに、善導の「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没み常に流転して出離の縁あることなき身と知れ」という金言にすこしも違わせおわしまさず。されば辱くもわが御身にひきかけて、我等が身の罪悪の深きほどをも知らず、如来の御恩の高きことをも知らずして迷えるを思い知らせんがためにて候いけり、と歎異抄にある。このような聖人の御教があるのにそれを聞かず、聞いても耳に聞き流している、だから、われはわろき、そくばくの業をもちける身であることも知らず、三世流転の罪濁の凡夫であることを知らずにいるので、誠に聖人に対し申しわけのない罰当りの奴になっている。正信偈にも、邪見、驕慢、悪衆生、信楽受持甚以難、と云われてあります。

五

「これによりて一人づつも心中をひるかえさずは、永き世、泥梨（ないり）にふかく沈むべきものなり」泥梨は地獄のことである。一人一人でも各々自分の心の中をひるがえして、自分のわるくあさましく、仏の御恩の深いことを知るようにならないと、とこしえに地獄に沈むとの仰せであります。

この文中の「心中をひるがえす」とは「廻心する」ことです。今までわが身のあさましく、仏の御恩の深いことも知らずに迷うていた者が、今までの心を改めて本願を信じ念仏もうすようになるのを云うのです。この文の初めにあげた妻君の例でいえば、「われは清く正しい身である、この清さ正しさをもって夫を感化しなければならない」と思っていたのが行き詰ってしまって、却って夫の心を遠ざけ自分も色々に悩み苦しむに至ったとき、始めて本願の教を聞き、自分のあさましさにめざめ、罪の深きを知り、即ち懺悔称名するに至ったことです。

人間の心は相対的であります、虚仮不実であります。たまたまよい事をしてもすぐに「われ」という念がつきまとうてくる、このままの心では何処までいっても駄目であります。よく教を聞かねばなりません。

然し廻心は「一人づつ」のことです。信心の問題には一人づつということが肝要です。弥陀の五劫思惟の願を、親鸞一人がためなりけりとおいただきになりました。信心の人は十人は十人ながら、皆各々自分一人を懺悔し、自分一人に仏恩の全分をいただくのであります。聞書一七一条に「往生は一人のしのぎなり、一人一人仏法を信じて後生を助かることなり、他事のように思うこと、かつは我が身を知らぬことなりと円如上人仰せ候いき」とある。又「仏法は一人いて悦ぶ法なり」ともあります。

但し「親鸞一人がためなりけり」と頂かれたお念仏も、これ実に「弥陀廻向の法なれば功徳は十方に充ちたまう」真に自己一人を懺悔する者は、即ち十方衆生の罪を己れに負う者である。同時に、真に一人の念仏は自然に金剛の信徳が十方衆生に伝わる源泉になるのであります。

その故に、ただ深く自己にたちかえり、そのあさましきを照らされ、心をひるがえして本願に帰し、念仏往生を遂げさせていただくばかりです。もし己れのあさましさをも知らず、念仏のとうとさもしらずに迷っていると、死後永しえに地獄におちるに違いない、それこそ罰当りの奴になってしまいます。

六

「これというも何事ぞなれば真実に仏法の底を知らざる故なり」

そうなるのは、ほんとうに仏法の根本を知らないからである、と。仏法の根本義は「悪凡夫の弥陀をたのむ一念にて仏に成る」ことである。「凡夫往生、ただたのむ一念にて仏に成らぬことあらば、いかなる御誓言をも仰せらるべき証拠は南無阿弥陀仏なり、十方の諸仏証人にて候」という御語もあります。

又「法敬に対し仰せられ候。信心安心といえば愚痴の者は文字も知らぬなり。信心安心などいえば別のように思う

なり。ただ凡夫の仏に成ることを教うべし。後生たすけたまえと弥陀をたのめと云うべし。何たる愚痴の衆生なりとも聞きて信をとるべし。当流にはこれよりほかの法門はなきなり」と仰せられ候。

すなわち知る、遥かな古から迷い来り、行末永く迷い去らねばならぬ罪業の凡夫が、弥陀仏の本願から成就された南無阿弥陀仏の御廻向にあずかり、この徳力一つにて往生させて頂くのだと信じて、即ち必ず浄土に生れて直ちに仏と成ること、これが仏法の底なのであります。わが身のあさましく、わが力の弱く「われはわろき」者であることを知らないから、又同時に、このあさましき身を久遠劫来憐れみましまして、救わんと招き喚びます如来のお慈悲を知らないから、南無阿弥陀仏を知らないから、永き世、泥梨に深く沈むのであります。

七

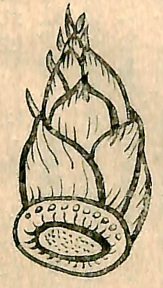
蓮如上人は、かくの如くに私共をおいましめおきくだされました。しかれば則ち、とく仏法を聞いて、お念仏もうさねばなりません。「念仏成仏、是れ真宗」であります、南無阿弥陀仏。

昭和二年十一月一日、京城にて。

十二頁の続き

わたくしたちは、この人生で大きな障碍につきあたったとき、なかなかおいそれとは身心のもだえから抜け出せるものではありません。いく日か、ときには何カ月にもわたる苦しみにつきまとわれるのが常であります。凡夫の身には、そのような苦しみ悩むさ中には容易にそれとは気づきませんが、後になってふりかえってみたり、おのが念仏をきいたりして、はじめて「無碍の一道」とはそれかと判らせられることです。そしてそれと気づいてみれば、それが喜びでもあり、また心強さともなる、ということが、この年ごろになってやっと判かけてきたと申せます。「無碍の一道」とは、お前には念仏があるからくじけないように、とのわたくし一人に対する弥陀のよびかけのことばのように味得される今日このごろであります。

（一九七八・二・七）



歎異抄のすすめ

——道を求める若い人びとに——

田村実造

悪人の救い　（第三条）

本講では第三条から始めたいと思います。その本文は、つぎのとおりです（今様かなずかい）。

善人なおもって往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを世の人つねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人おやと。この条、一旦そのいわれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善の人は、ひとえに他力をたのむこころ欠けたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども自力の心をひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩悩（ぼんのう）具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなるることあるべからざるを哀みたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もっとも往生の正因なり、よりて善人だにこそ往生すれまして悪人は、と仰せそうらいき。

第三条は、はじめ「歎異抄との出会い」の項でも述べたように、わたくしには特別の因縁深いものがあります。わたくしはこの一文に対し、はじめは字面（じずら）の上だけでは、いちおう解ったつもりでいましたが、ほんとうに納得できたのは六年後に念仏に目覚めたとき、いやその直後のことでしたから、六年間かかったわけです。

この条の冒頭の句は、われわれ一般の倫理観からすれば、ここにいうように「しかるを、世の人つねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや」とすべきでしょうが、それを「善人なおもって往生をとぐ（救われる）云云」と書き出しているのは、いわゆる逆説的表現であるといわれています。しかし逆説的とか一般的とかいうの

は、われわれの常識的尺度からいったもので、他力念仏の本意（たてまえ）からすれば、逆説的表現はあたりまえの表現なのです。宗教的にみれば、われわれ衆生（しゅじょう・人間）は煩悩具足（ぼんのうのかたまり）であるから、その行動も、語ることばも、また心に思うことまでも、すべて罪過である。弥陀（ほとけ）の絶対善の鏡に照らせば、われわれ人間の作業は清らなものは一つとしてなく、ことごとく不浄であり罪過であるが、それはわれわれの煩悩のせいであることを知らされるのが罪悪観であり、ここにいう悪人とは、その罪悪に気づいたもののことなのです。われわれ衆生は、この煩悩ゆえに罪過をかさねつつ、永劫に救われることなく流転しつづけるばかりです。弥陀の本願とは「この衆生のたましいを救済せんとする堅い意志」なのです。

煩悩具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざる（迷いから逃れることができない）のをあわれみたまいて、願をおこしたもう本意とは、このことなのです。では弥陀の本願は、いったいだれをめざすのか。それは

いずれの行もできない身の無力さに気づき、自力の心をひるがえして、他力―弥陀の本願をたのむわれらであり、つまり煩悩多きがゆえに、自力ではいずれの行によっても、生死をはなれる（救われる）ことのできない身であるのに気づいたもの、をいうのです。ここのところは、前前回にのべた第二条の親鸞聖人の告白のなかの「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」の一句とよく照合してほしいのです。地獄一定（地獄へ行くほかない）の身―とても救われないわが身だと自覚すれば、そこから弥陀の本願を信じて念仏するという実践がうまれ、さらに生き抜くための努力がわいてくるはずです。

要するに、この第三条は「弥陀の本願」の対象（めあて）は、衆生―われわれ人間のうちの何人（なにびと）なのかを、このような端的で力強い文章によって表現したものなのです。ただここで心して読まねばならないのは、弥陀の本願のめあてが、煩悩具足の衆生、自らの無力に気づいた衆生だといっても、それは他人ならぬこの自分であるとの自覚に立つことが肝要なのです。第十八条に

上人のつねの仰せには「弥陀の五劫思惟の願（長い長いあいだ考えて立てた本願）をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」

とあるのは、ここのところです。また池山先生が、第二条の「親鸞におきては『ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし』と、よき人の仰せをこうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」の一文のなかから「親鸞におきては」を「池山におきては」とおきかえることによって念仏にめざめることができた、とよくいっておられたのも、わが身一人と自覚されたからだと思います。

無碍の一道　（第七条）

第一条につづいて第七条も、弥陀の誓願によって創造された念仏が、あらゆる善にまさる絶対善であり、絶対的能力（オールマイティ）をもつことを強調したもので、その本文はつぎのとおりです。

念仏者は無碍（むげ）の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者（他力念仏の信者）には、天神・地祇も敬伏し、魔界・外道（まかい・げどう）も障碍（しょうげ）することなし。罪悪も業報（罪悪を犯したむくい）を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なりと云云。

第七条もわたくしには、高校生時代から深い感銘をとどめている一文です。そのころからこれを「念仏とともに障碍（さわり）をのり超えてゆく」というような、いわば肩肘（ひじ）張った強がりをもって味わい、ややもすれば人びとにも、そのような意味あいを、おしつけがちでありました。戦時中も応召する人びとや、出陣する学徒諸君の日の丸に、よくこの「無碍一道」の四字を書いてあげたものでしたが、それもやはり強がりの気がとれなかったからであろうと思います。

さて京都大学を定年退官する前後のころであったと思う。ふと、じぶんの六十余年の人生をふりかえると、それは羊腸とつづく一すじの道のように感じられたのでした。おもいめぐらすと、この長い道には、そのひと時ひと時には、とても超えがたくて絶望的にも思えた処世上の谷もあれば、あるいは研究にゆきつまって、たたいても押しても容易に開くことができなかったような、いくつかの堅固な扉（とびら）もありましたが、このような障碍をのりこえてきた今の心境からすれば、じぶんにはやはり念仏があったからこそ、障碍のままが、そのままのりこえることができたのだと気づかされたしだいです。無碍の一道とは、さわりが無くなるのではなく、さわりのあるまま超えてゆける相（すがた）だと気づかされたわけです。

―― 以下九頁下段に ――

足利浄円師ご法話随聞記

——不　請　の　友——

西　元　宗　助

「自照」誌に旧年、足利浄円先生の「念仏者のひぐらし」が連載（自九月号、至十二月号）された。たまたま拝読し、再読し、仰いで讃嘆いたしました。肝要のところに朱の傍線を引いているうちに、ページ全体が赤くなるほどであった。しかし、ところどころ意味不明のところがある。また明かに誤記誤字と思われるところもある。よって編集者の中井玄英兄に伺うと、この遺稿は、浄円先生が御生前、内容からして先生のお年八十歳の最晩年、お西の総会所（そうがいしょ）の「広大会（こうだいえ）」の会において法話されたものを、総会所の関係者によって筆録され印刷されたものに拠る、とのことであった。なを浄円先生の校閲をえたものではないようで、そのために前述のように意味不明のところなどあるが、しかしそれにしても非常に有難い。それで、私の深く感銘したところ、特に「不請の友」と先生の心をこめてお話になったところを、左に掲げてあらためて拝聴したい。但し私自身の諒解のため、先生のお言葉をなるべくそのままに生かしながらも、その肝要のところを要約し、いわば浄円師ご法話随聞記の形にして紹介した。文責はもとより私にある。

不請の友

阿弥陀さまとは、どういうお方かというと「不請の友（ふしょう）」だと。不請の友ということは、親鸞聖人がご信心のお話をなさるとき、いつでも仰せのことであります。即ち、私どもが仏さまに請わないのに、頼（たの）んだ覚（おぼ）えもないのに、若不生者不取正覚と、如来さまがご本願をうちたてられたのでございます。

ご本願ということは約束ということ、誰に約束なさったか、といいますと、如来さまがご自身に約束されたのであります。私どもは知らんのであります。それで、これは約束といっても、世間でいう約束とはちがう。世間でいう約束、あれは二人で相互に約束する、即ち双約でありましょう。そうではなくて如来さまが御自身に約束—即ち誓われた、どういうことがあろうとも衆生を救わずにはおかぬと、ご自身に約束された。したがってそれは双約ではなくて偏約（へんやく）であります。

そこで偏約—誓願ということは、衆生が頼まんのに、こちらはそういう約束があるとは知らなんだのに、御本願を聞くことによって仏の御約束が顕現するのであります。それが、如来さまを「不請の友」というお心でございます。

もともと友という言葉は、ほんとうに打明け話ができるもののこと、しかし私どもは、人間同志でほんとうに打明け話ができるかというと、たとえ親子であっても、夫婦であっても、親友だといってみても、なにもかも包みかくさずに、すべてをありのままに打明けられるかというと、そうはまいらぬのであります。それが人間というものでございます。じっさい、ほんとうのことを打明けて語っていける、心の底から親しめる者が、一人でもこの世にあるかというたら、—厳密にいえば、実は一人もないのであります。何故にそうなのかというと、人さまではない、この自分の心の中に、欲や瞋（いかり）や愚痴やらが充ち満ちておって、身勝手—邪見憍慢であるからでございます。こういう私どもであることを「かねて知ろしめして」知り通しておられて、私どもが請めざるに、頼んだ覚（おぼ）えもないのに、ほんとうの友達になってくだされるお方は、天にも地にも阿弥陀さまお一人であられます。

不請の友ということは、じつは阿弥陀さまの打明け話でございます。阿弥陀さまの打明け話、それがご本願でございます。

（略）

如来さまがです。衆生の前にひれ伏して、どうかこれ一つ聞いてくれよ、これでないと本当に助からんぞと、こういうて如来さまが私ども衆生の前にひれ伏しておいでになるお姿が、南無阿弥陀仏のお六字であります。どうしても頭のさがらない高慢な私どもの前に、如来さまが頭をさげられて、たのむから来いよと呼んで下さってあるものが、これが南無阿弥陀仏でございます。

それで、大経に出ておられる阿弥陀さまのお姿は、不請の友といわれてあるのであります。不請の友ということは、お釈迦さまの大慈大悲のご生涯の上にもいただかれることでございますが、華厳経の上では普皆廻向と。

普（あまね）く皆、廻向（えこう）すると、私どもではなくて、如来さまが手をあわせて私共を拝んで、どうかこれを聞いてくれよと仰せになる。そのお心持が私どもの身にいたりとどいて顕（あら）われているのが、今現に手を

あわせておる自分の姿で、このように如来さまの方から手をあわせてきて下さる。それがとうとう私の姿の上にまで廻向してござる、これが普く皆廻向するということでございます。

皆さま、私どもが死ぬるときになりますと、みんな無くなる、一切が離れていく。独来、独去。親子も兄弟も、知識も財産も、みんな離れていく。そのとき、たった一つ離れんものがあるのでございます。それが阿弥陀さま。阿弥陀さまがお念仏となって廻向せられてある。これが普皆廻向とおっしゃったことの結論になっておるのでございます

このように阿弥陀さまは不請の友であると。大無量寿経だけでなく、華厳経を拝読しましても、また涅槃経にも、くりかえしお説きになってありますが、もう一度、華厳経の上で申させていただきますと、如来さまは恒（つね）に衆生に順（したが）うという願をもっていられると。私どもが如来さまに順がってゆくのではなくて、如来に背をむけてそむいていく私どもに、如来さまが恒（つね）にどこまでもどこまでも順いたまうと。大経でのお言葉で申せば、純孝な子が父母に仕えるように、如来が衆生に仕えておいでになると。これを皆さまのおなじみの正信偈のお言葉で申しますと「煩悩の林に遊んで神通を現じ」と、これが如来が衆生に仕えておいでるお姿でございますが、その如来さまのお心持は、華厳経の上に仰せのお言葉では、衆生を因（いん）として大悲をおこし、この大悲を因として菩提をおこし、菩提を因として正覚を成（じょう）ずとあります。

されば衆生の煩悩が素材となって正覚を成ずる、いいかえれば衆生のお陰で仏が仏たるの仕事が出来るのであると、寝ても覚めても衆生に仕え、衆生を拝んでくださるのであります。その光景が涅槃経（ねはんぎょう）になりますと、衆生を、打っても触（さわ）っても動かん業の深い親牛に譬え、如来さまはこの親牛につきまとうて離れない仔牛に譬えられて「慈悲随逐（ずいちく）すること犢子（どくし、子牛）の如し」と仰せであるのであります。

（略）

これを要するに、衆生の煩悩を自覚し給えるお方が如来さまでございます。如来さまが自覚して衆生に仕え給い、しかも衆生に仕えていることも忘れはてて衆生と一つになっていられるお姿が南無阿弥陀仏でございます。衆生の名はそのまま阿弥陀さまの名であり、阿弥陀さまの名がそのまま衆生の名になっているもの、それを南無阿弥陀仏と申すのであります

聞光願生

清水凡秀

○

或る先輩が、人間として生きていく根底を極悪深重の凡夫であるという自覚にたたなければ、到底人間が人間として生きてゆけるものではないと云われた。まったくその通りと思われる。すべての事件の解決がここから出発しなければ徹底的解決とは云われぬ。悩みそのものが一体どこから生れてきたのか。よくよくつよい御教えの光に照らされてまる裸身（はだか）の自分の姿に直面した時に、悩みの正体もわかり、従って事件は春の雪のように解決するのではあるまいか。

○

今日は四月八日、大聖世尊の御誕生日。一人湯のたぎる音を聞きつつ春の夜を冥想す。

「唯我独尊」何とした生き生きしたお言葉だろう。釈尊のこの世にまれませし、最初のみ声を思い出す度に、自分の生活が真底からおはずかしくなる。自分自らが暗い世界を作り、強いて小さな自分として自らいやしんで、狭い世界をつくる、何とした情ないことであるか。が、しかし幸いなるかな、その情ない自分を目当として叫んで下さる尊い御法を心にいただき、み仏のみ心を身にしみて感佩する時に、俄然、卑しき自分ながらそのまま有難き身にさせていただく。

唯我独尊!! そうだ。み法の通うて下されたればこそ、雄々しく立たしていただけるのだ。さればこそ、釈尊の雄々しいお言葉がみ法のたまものによって深く味われる。地上は今花の盛り。世尊の御降誕を祝するように。

○

今幸いにお念仏の一道にあわせていただき、悲しい時は慰められ、浮っ調子で居る時は叩かれ、不幸を歎いてはおのれを省みさせられ、その時々に調節していただく。何とした有難いことだろう。この偉大なお念仏こそ、なみなみならぬ法蔵菩薩の願行によって成就せられたことを思うとき、唯不可称、不可説、不可思議の御徳を仰がずに居られない。

○

さる方が見えられて云われるには、昔両替屋の小僧を教育するには、偽せ金を見せることはせずに、唯真物ばかりを見せて教育したものだと。

なるほど何でもない様な話であるが、深いものを味わわされた。私の様なものでも、常に如来の真実を聞かされているときに、偽せ物が出るたびに、はっきりと、私の醜さが見えてくる。親鸞さまが、真実を顕わす、と一生懸命に叫んで下さったお心が少しでも味わわせていただかれた。

○

さる日、骨董屋さんと語る。その方は普通のそうした商売をしている方々と違って、一見識を持っておられ、語られる一つ一つが非常に含蓄のあるお話でなかなか愉快であった。

物の真偽の程がどうしても判別のつかぬ時は、まずその物を一生懸命毎日眺めていて、さて一旦箱か何かに入れておき、何日かのちに取り出して見て、なお倦きが来なかったならばたいてい真物である、と申された。

やはり真物には倦きがないらしい。

○

春めき渡った今日、この頃、舗装道路に凍りついた雪を町内総出で取り除いた。見るからにすがすがしい春の町になったと思ったら、今度は少しの風に塵がとび廻る。

町内の若い人々が一晩がかりで路上に水を撒いた。あにはからんや、翌朝になったらしっかり凍りついてしまった。街行く人々は歩きにくいことおびただしい。自転車なんかは横すべりして見るも気の毒な様子だった。

良くあれかしと思ってしたことが意外の方面に飛んだ禍を巻いて多くの御迷惑をかけることが数多い。そうだ、私は唯、法を仰ぎつつまっしぐらに進むだけだ。

良きに謝し、悪しきに詫びつつ進むより外ないのだ。それが唯ひとつの道なのだ。私に与えられる心の落付き場所なのだ。

○

皆様から「あなたは仕合せな方だ」と云われる。いわれるまでもない、全く仕合せな人間である。

しかし、よくよく考えてみれば、皆様が不仕合せだと感じられる材料を沢山もっている。そしてまた、それをよく皆様がご存じの上にそういうことを云われる。不思議なことだ。まったく私は仕合せな男だ。

◆

◆

◆

念仏詩抄

木村無相

この一念は

和上おおせに
〃一念の時
摂（おさ）め取りて
捨てたまわず——〃

この一念は如来の一念
あの時ああ感じた
この時こう信じた
これらはみんな凡夫の一念
——
〃弥陀の誓願不思議に
たすけられまいらせて
往生をばとぐるなりと
信じて念仏もうさんと
おもいたつこころの
おこる時——〃
この一念は如来の一念
〃すなわち摂取不捨の利益に
あづけしめたもうなり〃

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

浄土真宗

和上おおせに
〃三帖の御和讃も
阿弥陀如来のお呼び声
八十通の御文さまも
阿弥陀如来のお呼び声
——
落ちかかる
身をばそのまま

和上＝禿顕誠師

救うぞと
ひまなくひびく
弥陀の呼び声――〃

浄土真宗
聞く一つ
弥陀の呼び声
聞く一つ
ナムアミダブを
聞く一つ
ナムアミダブと
聞く一つ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

そうではない

和上おおせに
〃信ずるとは
仰信することじゃ
聞いた心が
仏法ではない
仰せが仏法とは
このことじゃ――〃

聞いた心に
腰かけて
仰せたのまで
わが機をたのむ――
そうではない
〃仰せが仏法〃
と――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

六字が仏法

和上おおせに
〃大海嘯（おおつなみ）に
のこるものは
天上の月一輪
仰せが仏法なり

聞いた心が仏法では
ない――〃

聞いた心は
凡夫の心
ナムアミダブツが
天上の月一輪
ナムアミダブツが
如来の仰せ
仰せが仏法
六字が仏法――
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

我れも

和上おおせに
〃ドコソコのダレと
いう信者が
たいがいは定散の
艶（つや）と
我慢・我情の
角（つの）で
もたしてあるのじや
我れもその一人か――〃

我れもその一人か
我れもその一人か

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

法信抄

三月三十一日朝

三月二十日夕から二十九日までに、たった九日の間に狭心症の発作を五回おこし苦しみました。私の身を案じて下さる方々にまことに相すまぬことでございました。

これからはお見舞下さる方にはすみませんが、面会時間十分と主治医の先生に書いて頂きました。これから注意いたします云々。

（木村無相）

◆ ◆ ◆

世間虚仮唯仏是真

花田正夫

聖徳太子がお家庭でいつも、世間は虚仮なり、唯仏のみこれ真なり、と仰言っていたことは人々によく知られている。これについて、世間という言葉が現代では漠然としているため、太子の御精神を誤解し易いので明確にしたい。

仏教では、世間を、衆生世間と器世間に分けている。即ちそこに住む衆生と、その衆生の世界との二つである。仏ましませばそこは浄土であるし、人が住めば人間界、猫が居れば畜生界である。

親鸞聖人は、我等凡夫の立場から「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」と仰言っている。我々の衆生世間は、煩悩具足の凡夫で「虚」であり、器世間は、火宅無常の世界で「仮」である。そこは、よろずのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなし、である。これを太子は世間虚仮と仰言ったのである。

次に仏陀の衆生世間は、自らざとり、他をさとらし、そのさとらしめるのに神通力自在な徳を持たれた覚者で「真」であり、器世間は、種々に荘厳せられた清浄な光明土で「実」である。ところが我等凡夫には、清浄な心なく、真実の心もない、そこに仏陀から廻向されたお念仏ばかりが絶対のまことであり、そのおまことは、大海があらゆる河川の水を容れて一味のうしおに転じるように、我等相対虚仮の罪障を功徳のうしおと一味にして下さることを聖人が、念仏のみぞまことにておわしますと讃仰せられたのである。その真実は虚仮と対立したものではなく、虚仮をおさめてやがて真実と転成して下さる絶対の真実であることを忘れてはならぬ。これがそのまま聖徳太子の唯仏是真のこころである。

○

大略太子のお言葉を述べたが、これによって我々は何を教えられるであろうか。

我々は自分が煩悩具足の凡夫であること、即ち自身の虚仮さを自覚できない。口では我々は凡夫だからとよく言うけれど、それは自己弁護の言葉として使っているだけで、本心にはうぬぼれと身びいきな心があって、自分自身のそらごとたわごとまことあることなしとは思えぬのである。

聖徳太子は十七憲法の第十条に

「人皆心あり、心各々執れることあり、彼よしみすれば則ち我はあしみす。我よしみすれば則ち彼はあしみす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共にこれ凡夫のみ。よしみしあしみするのことわり、なんぞ能く定むべけんや。相共に賢く愚かなること、鐶（みみがね）の端（はし）なきがごとし、云々」

と示されて、われよし、われかしこしと独善、独断して、互に争いあう我等に「共にこれ凡夫のみ」ときびしく反省をうながされている。このことはいやと云われぬ鉄則でその通りであるが、結局は頭で理解出来るだけで、何事か実際問題に出会うと矢張り、われよし、われかしこしとなってしまう。このことは、生れた以上死は必然であるのに、自分の死は拒否して、最後まで死なぬ者のように振舞うているのと同じである。たまに大病でもすると心細くなるが、小康を得ると旧の木阿弥になってしまう。

私が学生時代に、真田増丸師が「今日も人の死ぬ日にて候」ということを座右の銘にしていられると聞いて、何故ですかとおたずねしたら、わしが何時もこのことを忘れて浮いた生活をするから、自分の誡めとしている、とのことであった。「共にこれ凡夫のみ」の一句も、座右の銘にして自誡としたいものである。

太子の三部経のうち、維摩経には、小乗根性を砕いて大乗に転入することを鋭く説かれているが、勝鬘経は、大乗の中でも、菩薩の第八地、不動地を中心に説かれたものである。この菩薩の境界が開けて、はじめて、凡夫としての自覚が出来る、換言すれば夢がさめて夢を知るように、凡夫地を脱し得てはじめて凡夫であったと自覚されるのである。太子はこの経を深く学ばれたうえから、共にこれ凡夫のみと示されたのである。我々はこのことを、どんなに忘れまいと思っていても、水に書いた字で、すぐ消えてしまう。そこで我々に出来る極限は、そのことを仏や菩薩から聞いて信知するだけである。しかもそれは、これで解ってしまった、もう大丈夫とは云えない、すぐ忘れる、だから何時も聞けるようにせねばならぬ。

蓮如上人が、笊（ざる）に水を注いでもすぐ流れ出てしまう、その笊を水につけよ、と云われ、又、さいさいに信心の溝をさらえて、弥陀の法水を流せ、と仰言るのも、御自身の笊の心をよく知られていたからであろう。弥陀の法水とは、信心海から流出する念仏である。

博多の萬行寺の七里恒順師は、煙草好きで、キセルをい

つも使っていられたが、そのキセルを示されて、これも掃除をしないとズウズウがたまってにがいものが出る。信心のキセルも称名をおこたると、いろいろの障りがおこるものだ、といわれた由である。

広島の妙好人の弥七同行は、麹（こうじ）を売っていたが、いつも、みてござる、みてござる、ありがたいことじや、おそろしいことじや、といって念仏していた由である。彼の生活はまことに立派であるが、その内心に、人が見ていないと麹をごまかしたい心がうごめくにつけて、みてござる、仏様がみてござると繰り返さずには居られなかったのであろう。

以上は、脱線しずめの私共を弥陀仏が摂取不捨して下さることを具体的に教えられる事例である。何時も申し上げるように、我々が仏心のふところにおさまって、おとなしくしているのであれば、不捨は無用である。それなのに、摂取して捨てじとは、我々がいつも仏様にうしろをむけて、逃げ廻り、脱線しずめであるから、逃げる者をつかまえて決してはなしはしないぞとのお誓いをおこされたのである。

親は子になくてはならぬことのために辛苦する。仏は衆生になくてはならぬことのために、五劫の思惟、永劫の修行を続けられるのである。第十二の願に光明無量、第十三の願に寿命無量を誓われたのも、我々が何処に行っても失敗を続けるから、何処に居ようとも仏様は眼をはなされぬのである。又、何時まで経っても独り立ちの出来ぬ身だから、何時何時までも護り抜いて下さるのである、これが、光明、寿命の無辺、無量ならんとお誓い下さった根本の原因である。仏典を拝読する際、ハテどうしてこのお誓いがおこされたかと自己を省みる時、こうした愚悪の身のために、こうした罪業を持つ身のためであったと仏恩の深厚さを仰がせていただくことができるのである。

聖徳太子にしても、世間は虚仮なり、唯仏のみこれ真実なりと、お家庭で常に仰言ったのも、太子が虚仮を忘れ浮かれる事を、御自身に言いきかされては、あたらしく仏心のおまことに帰られてほれぼれと渇仰されたことであろう。具体的に云えば、国民の永遠に進むべき道を十七憲法に発布せられたのであるが、所謂、閥族権臣達は、従来の我儘な生活を続け、太子の理想をさまたげることも多いにつけ、太子の御歎きは、共にこれ凡夫のみ、と立ちかえられ、この凡夫の性として枉（まがれ）る道しかたどれぬにつけ、それ三宝によりまつらずば何をもってか枉（まが）れるを直（なお）うせん、と仏の慈懐を渇仰せられたのである。

ちなみに、私の病床をお見舞下さった近角常音先生が、座右に掲げる銘文として、

常観言

またやりそこない、またやりそこない、それだからお呆（あき）れないお慈悲でないか　　常音

と短冊に書いて下さったことを思い併せる。煩悩具足の身として、相対虚仮の心しか持ち合せていない我々には、絶対真実な事を聞いてもつねに保つ力はない。何度聞いても何度聞いても、その時は御もっともとうなづきながら、水に画いた絵のようにすぐ消えてしまう。

ゲエテは「われわれは真実なものをいつも忘れるから、くりかえして聞かねばならぬ」と述べているが、さすがにゲエテは、われらの虚仮の心をよく知っていた人と思う。

仏はこうした虚仮の身をよくしろしめされて、いくら聞いてもやりそこないのやまぬ我等を、立派になってこいでもなく、やりそこないのやまぬのもしかたがないでもなく、どうしてもこうしてもやりそこないばかりする虚仮の身を、心配するな、苦にするな、呆れはしない、捨てはしないぞと大悲の御手をさしのべて下さるのである。

相対差別しかない世に、このようなまことはまたとないたったひとつの不思議なまことである。だから我々はそれを信ずる力もないのである。そういうことがあるとは思えないのである。ここに、我等の信じ得ないことも百も御承知の上に、それでひとりぼっちの孤独の闇に塞ざされているのがなおなお不愍であると、救いの手をいよいよさしのべて下さるのである。私はここで姥捨山の物語を想う。

奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ
　親の身すててかえる子のため

と、捨てられながら、捨てる子のために枝折りせずにはいられないこころ！これが仏のおまことに通じる。

我等、この広大無辺な大慈大悲をこうむりながら、それに気づき得ず、そむいてはやりそこないを続ける身に、お念仏の枝折をして下さり、称我名字と願じられながら、もし我が名を称えるものが空しくなるならば決して正覚はとらぬとの、捨身のお誓いをたてて下さるのである。

噫！　選択本願のお念仏、邪見、無信の我等のために、えらびに選んで下さった、称えやすく、たもち易いお念仏こそは、煩悩具足の我才がための大悲の至極である、求めるすべもしらず、求めようとする心もおこらぬ我等に、向うから願わず、求めないのにおあたえ下さる無上の宝珠である。

あとがき

新緑の美しい頃となりました。例年のように山頭火の

分け入っても分け入っても青い山

の短冊を揚げました。大道無窮を想い、苦海ほとりなしとも受けとられ、見る時の心次第でどちらにもうなづける句のようです

本月号は、近角先生が上皮癌で東大病院に入院中の常瀬師を見舞われ、すでに言葉が出せぬまでに病状が悪化していられるので、筆談を交わされた記録を頂きました。岡山の西本清三様の大切に保存せられているものです。白井先生はこれを拝見されて、その余白に

みほとけのひかりにあそぶはらからがかたみにかはすまごころのあと

西本氏の求めに応じて書き添えられました

次に白井先生の「信仰と生活」から、一文をいただきました。いつも忘れて振舞う私共は「われはわろし」を座右の銘にしたいものです。

田村様の歎異抄のすすめは、大悲心の至極ともいうべき第三条と、信の力強い旅を説かれた第七条を讃仰して下さいました。道を求める若い人びとに一と但し書きされて、よく噛み砕いて述べて下さいました。

西元様の足利先生のご法話随聞記で、不請の友について詳しく知らせていただきました。真実の友を求める資格もなく、また求めるすべも知らぬ身に寄りそうて下さるお方、それこそ本当にたのもしい方であります。

清水凡禿居士は、信の歩みのままを闇光願生誌にしるされ、盛岡の地に一隅を照らして下さった方であります。割合にお若くして亡くなられたことは惜しまれてなりません

木村無相さんは、いよいよ「面会十分」の張り札を出されて、人なづかしい心を鞭打たれての療養、いま三ケ月を目標に病院生活を続けていられます。在家仏教誌の五月号にラジオで放送された「私の詩と信仰」が十頁にわたってトップ記事になっています。有縁の方はお続み下さいますように。

本年になって、神戸の学友、曾我了雲さんが、次いで京都で自照誌の発行、発送、事務を続けて下さった真人、佐々木徹真さんが亡くなられました。文字通り、春寂寥をおぼえます。頼むはただ「倶会一処」のみ仏のお誓い一つであります。

○

岡崎一道会御案内

時・五月二十八日（日）午后一時。
所・岡崎市大西町下西一、杉浦豊宅。
人・花田正夫、酉元宗助、榊原徳草等の諸先生、
名鉄男川駅より北へ約五〇〇米、徒歩十分

〈御案内〉

○ 毎月第一、二、三日曜、午后一時半。一道会例会。
南区駈上町二の八八。花田宅
市バス、新郊通り一丁目下車、東入る三筋目、左入る。地下鉄、新瑞橋下車。名鉄、呼続下車

○ 毎月二十四日、午前午后。
昭和区小桜町、教西寺、法話会。
市バス、御器所通り、又は北山下車。
地下鉄、御器所通り下車。

○ 毎月七日、午后一時半。〔日曜は変更〕
尾西市三条板倉、蓮光寺、修道会。
名鉄、新一宮駅よりバス、西三条下車。

定価　半年　七〇〇円（送共）
　　一年　一四〇〇円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　坂部光雄
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光　第三十巻　第五号　昭和五十三年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月十三日　第三種郵便物認可